

## 昭和の南海地震体験談

氏名: 濱田 和夫 (はまだ かずお)  
生年月日: 昭和4年3月13日  
地震を体験した場所: 由良町・自宅寝室  
当時の家族状況: 父、母、姉、妹、弟



### 1) 地震発生時の状況

当時17歳で父と漁師をしていた。火の用心の夜回りという習慣があり、その日は父が当番になっていた。午前2時に回る予定だったが寝過ごしてしまったので、父は夜回りをやめて、浜に日和を見に行った。浜で、父は偶然沖の方に火柱が立ったのを目撃した。変に思った父は帰宅し、家族を起こした。「起きろ！ひょっとしたら大きな地震が来るかもわからんぞ」と言う言葉に返事をしたが、半信半疑だった為、そのまま布団の中で起きていた。父に起こされてから30分程経った頃、激しい揺れに襲われた。用意ができていたので、すぐに全員外に出た。自宅家屋が大きく左右に揺れていた。揺れが収まるまで外で待機していた。

### 2) 津波襲来時の状況

地震＝津波ということは誰からという事もなく親の代から認識されている事だったので、揺れが収まってから持ち船の様子を見に、1人で浜まで行った。船は変わりなく無事だったし、海の様子もその時点では変わったところは無かった。確認した後、横浜地区に住んでいた親戚に津波に注意するように伝えに行き、自宅に戻ろうと歩いていたら、第1波が道路に流れ込んで来た。地震が起こってから約40分後だったと思う。自宅と反対方向に避難することにし、「津波やぞー！」と大声で近隣の住宅に避難を呼びかけながら、里地区方向に走った。全力で走ったが、津波の勢いが強く潮に追いつかれ、足を濡らしながら小学校まで避難した。水際で潮を見ながら待機し、引いた時に自宅方向に向かうが近づけなかった。何回か繰り返した後、ようやく自宅に戻れ、様子を見る為に中に入った。ざっと見回した時に再び潮が流れ込んで来たので、すぐに山に上り、家族のいる避難場所に行き、合流した。家族は戻って来ないので、流されたのかと心配していたようだ。避難場所だった神社の境内は避難して来た人で一杯だった。入れずもっと上まで登った人もいたと思う。津波は見た限りで4～5回来たと思うが、その後は分からない。

### 3) 家族の行動・被害

父の機転のおかげで、家族に避難用意ができていた。すぐに行動でき、無事だった。母は米袋を持って出たが、避難しようとする人混みの中で落としてしまい。暗い時間帯だったので、後から来た人達に踏まれ、探すこともできなかった。夜が明け、明るくなり、海も落ち着いた頃

に自宅に戻った。床上1m50cm程度の所まで濡れた跡が残り、障子上部の2マスに和紙が残っている状況だった。流れ込んできたドラム缶が柱の1本を折ってしまっていて、家屋が傾いてしまった。家財道具がほとんど流失しており、ちょうど用意していた姉の嫁入り道具も流されてしまった。しかし、不思議にも布団は濡れておらず、どうやら床板・畳ごと浮き沈みしたようだ。持ち船は流され、阿戸地区の浜に打ち上げられていた。仲間の助けを借りて海に降ろした。幸い大きな損傷は無かった。

#### 4) 集落・周囲の被害

引き潮に引き込まれ、多数の人が亡くなった。紀伊防備隊宿舎に住んでいた一般の家族や海辺の人、忘れ物などを取りに戻った人達がほとんどだった。また、地震後にもう一度寝た人達もいたと思う。不明者は地域を挙げて救助や捜索をした。海辺に住んでいた親子がなかなか見つからなかったが、津波から1週間後に子供を背負ったままの姿で発見された。また、潮に引き込まれたが、流木につかまり、陸と沖を何度も往復したが助かった人もいたそうだ。

#### 5) 地震・津波後の生活

自宅を片付け、整理し、生活できるようになるまで1ヶ月かかった。その間は知人の所でお世話になった。井戸に塩水が入ったので、井戸替えする間は山手の浸水しなかった井戸を借りて使わせてもらった。食料も流失したが親戚や近所に助けてもらった。元通りの生活に戻ったのは地震から2ヶ月後だった。

#### 6) 次の災害への備え

家を建て替える時に地盤面を上げ、少しでも潮に浸からないようにした。年1回の避難訓練に参加して、避難経路や場所を確認している。地区で避難場所に小屋を建て、水や食料を保管している。家族の持ち出し袋を作り、着替えや水等、必要な物を入れて常備している。自宅近辺は避難経路が狭く、家屋が両側に建ち並んでいるので、地震の規模によれば家屋が倒れて通行できるかどうか分からないのがとても不安で広い避難道路が欲しい、等と家族で非常時の話をよくしている。

